

2013年 司教年頭書簡 信仰パート3

教区時報 2013年2月号 巻頭言

～ ともに喜びをもって生きよう ～

今年の年頭書簡のタイトルは、第1回ナイスの答申を受けて司教団が出した、宣言文のタイトルです。それは、信仰と生活が遊離している非福音的な世界に生きるキリスト者に向かって「ともに喜びましょう。私達にはキリストの福音がある」と励まし新しい歩むべき道を教えてくれました。

フィリッピ4・4でパウロが、ユダヤ教の異端と迫害にあつて信仰を保とうと努力するフィリッピ教会の信徒にあて「喜びなさい」と訴えます。何故なら、キリストに結ばれているのですからと励まします。

「喜ぼう」と訴えるのは、いつも喜びや希望が欠け始めた時からです。それはまさに闇の中にいる民(ひと)に愛と希望と命の光を喜びのおとずれ(福音)として伝えるのです(マタイ4・15～16)。それはまさに神の創造(創世1・2)と解放(すくい)(イザヤ8・23)によって示される神の愛の業なのです。

1. 神に愛される喜び

愛の喜びの源は、神の愛にあります。闇から光を産み出す神の愛の偉業、エジプト脱出やバビロン解放を実現された、神の偉大な愛の業を体験することから来る神の愛の不思議、それを知る喜びが民の心を満たします。その創造と解放(救い、贖い)の愛の御業を完成させた方が、私達のために生まれ命を捧げ復活されたキリスト。全ての喜びは、神から、キリストの愛の業からくる。これが私達キリスト者の信仰です。

年頭書簡は、神の愛について語る二つの箇所を引用します。一つは(一ヨハネ4・16)、もう一つは(一ペトロ1・8)です。この二つの箇所は、少なくともヨハネなら(4・1～21)を、ペトロなら(1・8～9)を黙想することをお勧めします。そうすれば、この引用の意味がより深く浮かび上がってくるでしょう。

(村上 透磨)

2. 神がそばにいてくださる喜び

「神の愛が、キリストの中に完全に実現したので、信仰の喜びは、イエス・キリストがそばにいてくださる喜びと言える。その喜びを発見した者は、自分の持ち物すべてを放棄させるほどである。」と年頭書簡は語ります。

神がそばにいてくださるのを知ることが、信仰に喜びをもたらす。「ああそうなんだ」と思います。

そこで尋ねます。「でもどうしたら、神様がそばにいてくださることが分かるのかなあ」「信仰の喜びが、分からないなら、その信仰は本物でないのかなあ」と心配して問いかけます。神様は時々、お隠れになることがある。私のことをお忘れになったのではないかと不平が言いたくなることもある。こんなをお願いしているのに、聞いてくださらない、ひょっとしたら神様っていらっしやらないのだろうかと不安になったり、不信仰への暗闇に覆われることがある。どうしたら神様が側にいてくださることがわかるのですか。時々神様は完徳に進もうとする人を精錬するために、信仰の暗夜に投げ込まれるというようなことを、ある聖人は書いておられます。

あの神への愛を委託と信頼に生きた、幼きイエスのテレジアが、1896年の復活祭から1897年9月の死の直前まで続いた、信仰の闇について書いています。外見上は慰めに満たされていたように見られる聖女は、虚無の闇に落とされて、その心の状態を「これ以上書けば、神様を冒瀆することになるので止めます」と書き「信仰の喜びは、信仰による業によってしか得ることは出来ません」と言うようなことを言っております。信仰に喜びがなくなったから、信仰が失くなるのではなく、むしろ愚かになり、幼児のように単純になって、神の憐れみを信じて、愛と委託の中で、祈りの内に待つ外はない時があるのです。人々を魅了するあの霊的幼児の道という霊性を生み出したのは、まさにこのような信仰の暗夜の時でありました。

(村上 透磨)

3. キリストを知る喜び

この項を前半と後半に分けて考えて見ます。

まず前半は、父である神とイエスは一つなので、キリストを知ることは、父を知ること。キリストを愛することは、父の愛を知ること。キリストの喜びを知ることにより、父の喜びを知ることになる。

キリストも父を知らせ、父を愛させ、父の喜びを与えたいので、ご自分の愛を知らせ、ご自分の喜びを伝え、ご自分を知らせたいとお思いになる。こうしてキリストを知る喜びは、御父を知る喜びにつながってくる。そうすればキリストがよりよく知られ、キリストを知る恵みをいただくことが出来るようになります。

ところで、その答えを知らされた人々はどういう人々なのか、彼に何が起こるのか、その答えをザアカイとキリストの出会いに見てみようというのが、後半部分になります。

さて、ザアカイとはどういう人物だったのだろう。彼は徴税人の頭、罪人の頭と呼ばれ、軽蔑と嫌悪でつまはじきにされていた者の代表。彼自身、自分はイスラエルの救いからはるかに遠いところにおり、公に罪人の頭とされていて、メシアを家に迎える事はもちろん、話しかけることも交際することも、神の前に頭を上げるに値しない者だと思っている。しかし、どうしたことでしょう、イエスの福音をまず受け入れたのは、このような小さな人、貧しい人、罪人と呼ばれる人、幼児、女性、寡婦、痛み、苦しみ、悩み、社会から見捨てられた人。無信心な者として神からも見放されたと思われていた人。聖書によると彼らはタペイノス(低い人、謙虚な人とも訳せる)と呼ばれる人々だった。しかし、彼らはそんな自分たちを友人として愛してくださるキリストを知る。それが「信仰の喜び」となり、その喜びが私たちの人生全体を、根底から創り変え、救いをもたらす力となるのだ、と言うのです。すべてを投げ打って、も得たいと思ったキリストに出会った人は、ここで自分の生き方全体が変容される力に、出会うことになるのです。

「キリストを知る」ことが、信仰の喜びをもたらしますが、キリストが自分を知り、愛し、受け入れて下さっていることを知ることが出来れば、

信仰の喜びはもっと輝くも

のになるでしょう。

(村上 透磨)

4. キリストを誇る喜び

神はエレミヤを通して、民に伝えます。

民が自分の知恵や富を誇ることなく、私があなた方の「主」であり、慈しみと誠実と正義であることを知り、理解することを喜ぶと(エレミヤ9・23)。

パウロは、これを受けてローマ書では、人を救うのは律法を自信にあふれて守ることではなく、むしろ主の十字架の死と復活によりもたらされた、その救いを神の愛と受け止めて、信じ生きることであると教えます(ローマ3・27)。

年頭書簡は「キリストを誇ることは喜びだ」と語ります。

イエスの福音の神秘を理解したと言うより、肌で感じるように直感的に悟ったのは、自分の義を誇る信心家ファリサイ派のような人ではなく、また律法を厳密に守りその知識を誇る律法学者たちではなく、幼児のような素直な信仰をもって愛の中に受けとめた人、例えば弟子たちのような、いわゆる小さく貧しい人々であったことを主は歓喜されるのです(ルカ10・21)。

このことをとてもよく理解したのが、幼きイエスの聖テレジアでしょう。聖女は自分の生きる道が、幼児のように愛と信頼の中に神に委ねて生きる生き方であり、また私たちのため、そのいのちを奉げてくださった神の憐れみに、自分をいけにえとしてささげる道であるとも申しました。

高慢な私たちは、信じている神を誇り「自分の信仰を誇る」とき、律法学者やファリサイ派の人のようになりかねません。幸いパウロは「主において誇れ」(Iコリ1・31)と書きました。「主において」なら、謙虚に主に結ばれているかぎり「小さな人」の一人として、主の喜びにあずかることが出来ると思います。

(村上 透磨)

5. 心の琴線に触れる喜び

年頭書簡は語ります。典礼は「信仰の喜び」を味わう特別な場です。七つの秘跡において、私たちは神の救いの恵みを祝い「信仰の喜び」で包まれます。したがって「典礼を単なる義務の対象、順守すべき儀式ではなく、いつも私たちと共にいてくださる神と交わり『共に生きる喜び』を体験し、分かち場に、人々の心の琴線に触れるような典礼を生み出す努力が求められます」（ナイス1より）

そして、ゆるしの秘跡は「信仰の喜び」を回復する秘跡ですと語り、放蕩息子のたとえを引用し、罪人の立ち帰りを喜ぶあわれみ深い「神の喜び」を語りかけます。

信仰の喜びは神の愛が与えるものであり、私たちが獲得すると言うより、恵みとして神が私たちに与えられた時、その信仰を誇らず謙虚に受け止める時、感謝と賛美へとつながっていくと言えましょう。

「典礼あるいは秘跡が、信仰の喜びをもたらす場であり源泉である」との典礼憲章の考えを理解するには「秘跡を神と人との出会い」としてとらえることが、私たちにとっては一番理解し易いのです。

「出会い」とは、愛によって自分を全て与え尽くそうとされる方と、自分を全て開いて喜びの中に謙虚に受け入れようとする者の間に生まれます。神が愛をもって全てを与えようとする。人は心を開き、愛をもってその全てを謙虚に受け入れる交わり、それが出会い。そんな「完全な出会い」は、神である御父と託身された御子イエスのうちに存在します。それは更に、キリストの神秘体である教会のうちにそのまま受け継がれ実現し、それが秘跡の中で具体化されます。

ところで、キリストにおける神との出会いは、主の死と復活において頂点に達します。主は御父と共に聖霊を送って、それを完成させます。そこに教会が生まれ、秘跡が生まれ「聖霊の交わりの中で、主キリストによって父である神」との出会いが実現していき、私たちはその時、神の命（の喜び）そのものにあやかるのです。…こんな驚くべき神秘的出来事が秘跡の中で実現していることを、私たちは知らねばなりません。その触れ合いはなんと妙なることでしょうか。ミケランジェロは、「アダムの創造」の時の神との神秘的な出会いを、神の指とアダムの指で描きました。何とあたたかく優しく愛にみちていることでしょうか。秘跡における出会いもこのよ

うなものではないでしょうか。

このふれあいこそ、心の琴線の触れ。

(村上 透磨)

6. 与える愛を生きる喜び

この言葉を聞くと、誰でもすぐ福者マザーテレサのことを思い浮かべます。

マザーテレサの愛は、まさにこの「与え尽す愛」と言うよりも、まさに「献げ尽す愛」であったし、その姿は喜びにあふれていました。でもふっと思いました。マザーは自分の愛を与えるのではなくて、ご自分の全てを(命までも)献げ尽しておられるキリストを(私たちが言う、いわゆる)小さな人々の中に探しに行かれたのではないか、と言うことでした。どうも高慢な私たちには、何か善行をほこり、そのような自分であることを見て、安心し喜んでいるのではないかと思わされることが多く、自分は愛にあふれた聖なる人になったんだと、何か自己満足している自分に気付くのです。

それに与えることや、捧げ尽すことは、犠牲や苦しみも伴うので、つい避けたいと思うし、そんなに心から喜んではしていない。仕方がないからやっている、そんな私たちを見て、時々人はあやまって優しいですね、なんて言ってくださる。そんな私たちには、信仰が足りないのかいと悲しく、はずかしくなる。

「何にも持たないでよいから、行って福音を述べて来なさい」と言われたので出かけて行くと「何かください」と物乞いされ、そこでペトロは言うのです。「私たちは何も持ってないけれど、一つだけ持っているものがある、イエス・キリスト様です、だからその方をあげます」(使徒言行録3・5-6)と、そうすると願いがかなえられ、二人の中に大きな「喜び」と「賛美」と「おどり」が生まれたのです。

何にも私たちは持っていないけれど、何でも持っていらっしゃる主キリストを持っている、それを分かち合うことが、あなたと私とそしてキリストの喜び(大喜び)なんですね。

有り難い

有り難い

(村上 透磨)

7. 信仰の喜びは、救いの喜び

この言葉を聞くと、ちょっとしゅんとなってしまう。ああ、私は救われてないのかな？信仰の喜びがない？。だったら信仰もない？。

そんな心配する人に向かって「そうではないんだよ」と語りかけているのが、この第7の呼びかけ。だからこの項の結びは「信仰の喜びを感じられない時でも、救われているという事実は全く変わらない」と聞かされて、ちょっとほっとする。

さて、これを説き明かすために、二つの聖書の箇所が引用されています。第1の引用はマタイ 28・8。「喜び」の反対は「恐れ」、ですからここで「恐れ」の意味をさぐってみます。マタイ 28・1－10の復活記事の中で恐れが何度も出てくるが、ちょっとニュアンスが違うみたい。4節の「恐れ」は震え上るほどの恐怖を表わすらしい。5節では天使が現れ「恐れるな」と言うが、それには理由がある「主が復活された」と言う事実裏打ちされている、むしろ畏敬の念。8節「喜びとも恐れとも」なる恐れがある。それが喜びになるのは「復活されたキリストに出会った」ことがもたらす。「いつもあなた方と共にいる」と言う約束と喜び、その実現を知る喜び。そして、その出会いが勝利をもたらすのは、悪ではなく神の愛による救いであることを知らせ、それが忍耐と勇気をもたらし、救われている喜びを感じて生きることになる。

第2の引用はフィリッピ 3・10－11、ここではその語りの順序に意義があります。キリスト者は復活したキリストに結ばれることによって、その新しい命と力を体験し、その結果キリストがそうであったように、世の苦しみにあずかるようになる。その苦しみは洗礼の時から、キリストの死にあずかり始めたキリスト者を、ますますキリストの死に同化される(ローマ 6・3参照)ことになると言うのが、この箇所の意味と想われます。死も受難も復活も聖霊の派遣も全て、神の愛の啓示であり、その神の愛が、神の義(救いと恵みの状態)を信じ生きることが、キリスト者が救われている喜びを讃え証しすることになると言うのでしょう。

(村上 透磨)

8. キリストの栄光にあずかる喜び

このタイトルを「キリストの栄光にあずかる希望」としてもよいでしょう。何故なら、不安や苦しみにある時に私達の中に働く、信仰の力(恵み)を語っているからです。

キリスト者にとっても、決して逃げることの出来ないこの十字架を、キリストを知り、愛し従うことによって、苦しみを救いの喜びへと変える信仰の力を与えられているからです。

人は普通どんなに深い信仰を持っていても、誰にとっても苦しみは苦しみであり、出来たら逃れたいのです。キリストだってそうでした(ルカ 22・42 - 44)。ただ血の汗を流しながらもそれを受け入れ、それに耐え忍ぶことが出来るのは、命をかけても私達を救いたいという御父とキリストご自身の願い(愛)があるからです。「出来ましたら、この苦しみの杯を私より遠ざけてください」と言われる。

私達もそう言ってよいのです。「でもみ旨でしたら」と言って、私達もそれが愛だから、私達もキリストのように愛したいから、何とかそれも受け入れようとするのです。キリストは十字架の苦難(パッション)を受けとり、それを愛(コンパッション)に変えられた。愛(アモーレ)が苦しみ(ドロレ)を引き受け、苦しみの業(救い)に変えてくださったという信仰、それが喜びをもたらす。そしてその道、即ち十字架が「天に昇る梯子(道)」となったから、この道を歩むことに希望もわいて来て、その愛が喜びを生み、苦しみも耐え忍ばせる勇気と希望を生み出して来る。

キリストの十字架とその道は、罪と死と苦しみと世(サタンの力)に完全な勝利をもたらすのだと、復活された主は確認されました。キリスト者は、キリストのように生きたい、キリストのあとを追いたい、キリストに倣って生きたいと思うものですから、またこんなに愛されているから、「とぼとぼ」としてでもついて行く。キレネのシモンとまでいかななくても「イエス様の十字架のはし」でも持って従って行きたいと思う。そうしてついて行ったら「カルワリオ」が「タボル」になり、あらあら、天の門にたどりついた。キリストを愛しているからついて行く、ついておいでと言われるからついて行く、天の門が開く、栄光と喜びの声が上がる。信仰の旅はゴールに達する。

(村上 透磨)

9. イエスに信頼する喜び

現代は、人間を信仰の喜びから遠ざけるさまざまな誘惑に満ちている。現在の浪費主義、快楽主義、物質主義は、豊かさこそ幸福があると思わせ、ネット社会はますますそれをあおりたてる。その結果、人々はその生活に、知らず知らず空しさを感じ始める。「物を所有することは真の喜びとはならないのに」と年頭書簡は、悲しみをこらえて語ります。そこでパウロの「悲しんでいるようで、常に喜び、物乞いのようで、多くの人を富ませ、無一物のようで、すべてのものを所有しています」(二コリ6・10)、つまり「イエス・キリストのみが真の喜びを与えて下さることを信頼し行動することが出来る」という言葉が出てくるのだと思います。さて、イエスだけが真の喜びを与える方だと知っているマリアは、人々の生活の中で真の喜びが欠けていることを知る事がお出来になりました。だからあのカナの婚礼においてマリアだけが、ぶどう酒が欠けたことに気付くことがお出来になったのだと。それは真の信仰の喜びを知る人だけが、真の喜びの「欠け」を知ることが出来るからだ、言うのです。

「キリストにならう」1章の3に、こんな言葉があります。「空しいことの空しさ、全ては空しい(コヘレト1・2)。ただ神を愛し、神に奉仕する以外は」と。でもちょっと注意しておかねばならないのは、快楽を求めている時、人はこれこそ楽しい喜びだと思い、そこに幸せがあると信じ込んで、情熱をこめて追い求めている。空しさが来るのはその後なのです。もっと悲しいことは、多くの場合その「欠け」にさえ気付かないことではないでしょうか。また逆に、その「欠け」を陰ながら支えて下さる方の「おかげ」で、今の自分の幸せがある事に気付けば、謙遜な感謝と喜びの心が、生まれてくるはずなのに。思うのですが、真の喜びや感謝の心は、無の発想から生まれるのではないか。もともと無にすぎず、何も持たなかった私達は、こんな恵みに満たされている。有難い有難いと思うことから始まるのです。そこで、カナの婚礼における奇跡に戻って考えてみると、水がぶどう酒に変わり、婚礼を祝福し喜びをもたらしたと言うこと以前に「空の水かめ」に注目します。私達が神様から信仰と生命の喜びで満たしていただくには、自分を「空にして御前に置くこと」から始める。ぶどう酒(喜びと命)に変えられるのは、神様の御業なのだ。(神様はお好きな様になさる)

(村上 透磨)

10. 交わりで深まる喜び

このメッセージの中心の「信仰の喜び」は、共に兄弟姉妹の交わりを生きることによって深められます。パウロは個人個人に対してではなく「(あなたがたは) 主において常に喜びなさい」と言っています(フィリピ4・4)。そこで二つの言葉に注目します。一つは、兄弟姉妹と「共に」であり、もう一つは「主において」であります。「人が会食を共にして」「財産を分かち合い」「喜びや悲しみを共にする」だけなら、それは、まだ人道主義やヒューマニズムの世界における愛の交わりによる、喜び、満足といえるかも知れません。しかし、キリスト者が交わす愛とその喜びは「主において」体験するものであり、それが「信仰の喜び」「信仰による喜び」「信仰における喜び」と言われるものだと思います。ちなみにギリシャ語の「アガペー」は「親しい仲間と共にする会食」を指していますが、キリスト教的には同じ「アガペー」は、キリストを通して示された神の愛を指し、私たちは、その神の愛(アガペー)を御ミサの中で体験します。それゆえミサは「アガペー」と呼ばれるのです。そのことを心に留めながらここで引用される聖書の言葉を黙想してみます。

するとこのメッセージの最も鍵となる引用は「主において喜びなさい」(フィリピ4・4)でしょう。すると「一緒に集まり、パンを裂き……一緒に食事をしていたら」は、その差し出された教え(みことば)、パン(キリストの体)を祈りの中に受け取ることからあふれ出る喜びとなります(使徒言行録2・42~46)。

フィリピ書2・17~18で「私と共に喜んでください」とパウロが求める時、彼は間もなく主のために犠牲となり、血を流すのを待っているのです。その捕らわれのパウロが、「自分と共に喜びを共にしてください」と書き送るのです。

パウロが自分の命を犠牲として捧げるのを喜びとするのは、それが私たちの救いのため自らの命を捧げてくださったキリストの愛に学ぶことであり、それが神への愛のしるしであり、迫害を忍びながら「泣き」「苦しみ」「痛む」人々によりそう愛を示すことが出来るからです(ロマ12・15、一コリ12・26)。

それはまさにキリストの生き方であり、そのキリストに倣い、キリストに従って生きることが、私たちに真の喜びをもたらすことになるのでしょう(一ヨハネ1・4)。

(村上 透磨)

11. 聖霊の実である喜び

信仰の喜びを語る時、聖霊の賜物と働きを語ることなしに、終えることは出来ません。

「信仰の喜びが聖霊の実である」のは、年頭書簡に語られている通りです。「神の国は…聖霊によって与えられる義と平和と喜びである」（ローマ 14・17）と。

ちなみに、「義」とは「神との正しい関わり」を意味し、聖書によればそれは神の憐みに他ならないことを知ります。また「平和」は、復活の主がもたらした恵みによる救いの状態をさし、愛も喜びも聖霊の実であり(ガラテア 5・22 - 23)、その極みが聖霊によって御子と共に、神を「アッバ、父よ」と呼べる最も深い神との交わりの中に実現するのです(ローマ 8・15)。その喜びを深く感じたパウロの心にあふれるものが「希望の源である神(アッバ)が、信仰によって与えて下さる(キリストの)喜びと平和でみだし、聖霊の力によって生きる希望にあふれさせて下さる」(ローマ 15・13)と言う祈りでした。

以上がこのテーマの内容と思われませんが、そこに見のがしてはならない視点を加えておきたいと思います。

ここに引用されている聖書の箇所は、みなパウロの手紙と呼ばれるものからですが、パウロが「霊」と言う時、それは、たんに聖霊について語っているのではないということです。例えば、ガラテア書の「霊」は「肉」と対照して語られているのですが「肉」は肉欲をさすのではなく、神と離れた自己中心の生き方(エゴを偶像とする生き方)をさします。「霊の人」とは、「神を中心にした、神に忠実に謙遜な人」をさします。また律法の束縛に生きた人を律法の奴隷と言い、福音により霊によって自由な神の子とされた人を「霊の人」「新しい人」「光の子」と呼んでいます。一言で言えば「霊に生かされた人」とは、神中心に生き、すべてにおいて神を第一位に置き、神の国と神のみ旨と神の教えに従って生きる謙遜な人をさします。

このように聖霊は、実に信仰者の心を神に全く開け渡させ、同時にその人を神の霊や命や恵みや愛で満たす役割を果たされるのです。そのため、聖霊はキリスト者に砂漠の体験をさせます(注 ルカ 4・1)。聖霊は感動や興奮や熱意の中に働くと期待してはなりません(列王上 19・11 - 12)、聖霊は自分を無化した者に神の命と霊で生かすのです(注 創世記 2・6 - 7)、自分を完全に無化した人にみられる神の命の躍動、それが聖霊のもたらす喜びと思えます。

(ルカ 1・46 マニフィカト)

マリアこそ、聖霊の喜びにあふれたお方でした。

(村上 透磨)